都市環境創造における利他思想の役割 - 近江八幡市を事例として -

著者	三輪 信哉
雑誌名	大阪学院大学国際学論集
巻	21
号	1
ページ	1-20
発行年	2010-06-30
URL	http://doi.org/10.24730/00000105

Osaka Gakuin University Repository

Title	都市環境創造における利他思想の役割－近江八幡市を事例として－ A role of altruistic concepts in the creation of an environmentally sound local area: A case of Ohmi-hachiman City in Siga Prefecture
Author(s)	三輪　信哉 (MIWA NOBUYA)
Citation	大阪学院大学　国際学論集（INTERNATIONAL STUDIES), 第 21 巻第 1 号：1-20
Issue Date	2010.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

都市環境創造における利他思想の役割
—近江八幡市を事例として—

三　輪　信　哉

A role of altruistic concepts in the creation of an environmentally sound local area: A case of Ohmi-hachiman City in Siga Prefecture

MIWA NOBUYA

ABSTRACT

In these days, global environmental issues have been eagerly discussed, and at the same time, how to make cities and towns environmentally sound have also been discussed. Especially, in order to solve global warming problems, each city has been planning to reduce CO_2 emission from various urban activities as considering the influence of accumulated amount of emission in the future. Most of municipal governments are enthusiastically discussing and planning a basic environmental plan, landscape regulation, and other important measures related to environment.

In this paper, Ohmi-hachiman City, which became a popular research spot of many researchers in the recent years because of its urban planning, is focused on as a case study area. What the basic concepts of city's environmental planning are and how the concepts have been historically formed are analyzed and discussed here. These concepts, formed by Ohmi merchants in the Edo period and W. M. Vories, a founder of Ohmi-kyodai-sha, are based on altruism, but not on egoism, and furthermore, altruism underlies the concept of "sustainable development".

Understanding the concepts that existed in the past emerge in present buildings and urban space in Ohmi-hachiman City helps us to think how present environmental planning should be because it will also determine the future of both local and global environments.

1 はじめに

現在、地球環境問題が喫緊の課題として議論されており、足許の地域から環境に配慮した都市をどのように作るかの議論が進められている。数十年先の削減目標値を措定し、それを達成するためにと現在にフィードバックして、制度整備や都市計画を行い、将来に向けて環境に配慮した都市を形作ってゆく必要があるとされている。そのような流れの中で、各自治体では未来の都市の姿を見据えて、環境基本条例や景観条例を策定し、それに基づく基本計画づくりが盛んである。

本稿では、近年、研究上でも取り上げられることが多い近江八幡市を事例として取り上げる。同市の景観計画、都市形成の背後にある、地域に流れる思想が歴史的にどのように形成され、またそれが計画の理念にどのように反映されているのかを検討する。さらに、その理念が「利他主義」といえる概念を基盤にしていることを検討し、また持続可能な概念が「利他主義」の概念と通低することを示す[1)]。

近江八幡市の過去の思想が現在の姿となってあらわれていることをみることで、将来の都市のあり方を決定づける現在の環境計画のあり方を考える上での一助となろう。

2 近江八幡市の概要

近江八幡市は面積153km^2、人口約７万人の琵琶湖畔の小都市である。京都駅からJR東海道線・新快速で約30分と、至便な場所に位置しつつ、琵琶湖につらなる歴史的な景観が人気を呼んで、観光都市としても成功を収めている。近江八幡駅周辺には近年、新市街が形成されつつあるが、駅より北方向にバスで10分ほどのところに八幡山があり、その南に接して東

1）この論考は、NPO法人すいた環境学習協会主催、吹田市共催「2009市民環境講座第１回：吹田の環境の未来を今から創るには」（吹田サンクス一番館４階会議室、平成21年５月30日）と題して行った著者の講演を発展させたものである。

西約１km、南北500mほどの条理に区画された旧市街が広がっている。そこには八幡堀とよばれる掘割が整備されており、旧市街地の北西に位置する、琵琶湖の内湖である西の湖一体を含めて水郷の町として知られている。

表１　近江八幡市の概要［2009年５月］

面積	153.09km^2
人口	69,474人
世帯数	26,261世帯
人口密度	452人/km^2

古くから琵琶湖畔の水田が広がる地域であったが、豊臣秀次が1585年に八幡山山頂に八幡城を築き、整然と区画された城下町を整備し、城と城下町を守るために八幡堀を作ったところから始まる。秀次が豊臣秀吉から自害をさせられるまでの10年間、秀次は、自由商業都市を目指して安土城下から商人や職人を集め、城下町を形成した[2)]。

旧市街地には多数の歴史的な建造物が現在も残る。八幡城は秀次の死とともに廃城となったが、昭和36年に村山御所瑞竜寺が京都より移築された。山上まではロープウェイで４分ほどで登れ、新旧市街ほか、琵琶湖や西の湖などを一望することができる[3)]。

近江八幡は、東海道と中山道、北陸道を結ぶ交通の要衝であり、また琵琶湖上を船で往来する物流を城下に引き込む堀が町を大きく繁栄させ、いわゆる近江商人により繁栄を極めた。創建西暦131年と伝えられる日牟禮

２）豊臣秀吉の姉の子である秀次は、1585年（天正13年）18歳で、四国征伐の軍功により近江43万石が与えられ八幡城を築城、秀吉の養子となり関白を任ぜられた。しかし秀吉に実子ができたあと、1595年（文禄４年）に秀次は自害（28歳）させられた。秀次の名誉回復を願い、近江八幡市でNPO法人秀次倶楽部が活動している。秀次倶楽部 http://www.hidetugu.jp/（2009.05.20）

３）村雲御所瑞龍寺は高野山で自害させられた秀次の菩提を弔うため、1596年（文禄５年）に生母・瑞龍院日秀尼公が京都の村雲の地に建てた日蓮宗唯一の門跡寺院で、1961年（昭和36年）に京都より八幡山山頂に移築された。近江八幡商工会議所 http://8cci.com/kankou/kank11.html（2009.05.20）

八幡宮は近江商人の守護神として崇敬を集めた[4)]。

旧市街の広さ13.1haが「八幡伝統的建造物群保存地区」として、国によって1991年4月に指定されている[5)]。八幡堀や日牟礼八幡宮境内地に加え、近江商人の豪邸・西川邸など建築物180、工作物93が伝統的建造物として特定されている。商家町の新町通り、永原町通りを中心として、瓦屋根が美しい商家、町家、土蔵など、近世建築が立ち並ぶ。保存地区選定地域内部とその周辺には、後に述べる建築家ヴォーリズの設計した近代建築物も多い。

3　近江八幡を特徴づける思想

3-1　近江商人の思想の影響

滋賀県の愛知郡、蒲生郡、神崎郡などの出身者が多数を占める近江商人は、京都、美濃国、伊勢国、若狭国などを中心に行商し、江戸以降、京都・大坂・江戸の三都へ進出、明治以降、西川産業など企業として発展した。近江商人にルーツをもつ大企業も多数あり、また、世界最高水準の複式簿記考案や、契約ホテルのはしりとも言える「大当番仲間」制度の創設など、現代に通じると言われている[6)]。

その発展にはさまざまな要因があろうが、湖水と陸を結ぶ八幡堀の存在

4）誉田別尊、息長足姫尊、比賣神の三柱を祭神とし、二大火祭の「左義長まつり」と「八幡まつり」は国の選択無形民俗文化財に指定されている。日牟禮八幡宮 http://www 5 d.biglobe.ne.jp/~him 8 man/（2009.05.20）

5）八幡堀沿いには平成7年に開館した「かわらミュージアム」がある。瓦の歴史や製作技法、芸術性、実用性などを紹介している。近江八幡が瓦の産地として発展したのは水田の良質の泥が得られたためである。水路などから引き上げた藻を積んで田の肥料としたため、田が次第に高くなり、低くする必要から田の底の泥をかき出し、その泥を瓦原料とした。地域の自然に適応した産業であった。近江八幡市立かわらミュージアム http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?frmId=1280（2009.05.20）

6）末永國紀、『近江商人学入門―CSRの源流「三方よし」』（淡海文庫（31））、サンライズ出版、2004.10

に加え、東海道、中山道、北陸道を結ぶ地の利が大きい。畳表、蚊帳、米、酒などの地場産物を各地へ搬出し、各地の産物を持ち帰っては再び各地へ送り出すといった「諸国産物回し」と呼ばれる商法であった。

近江商人の商売哲学を表現する言葉が「三方よし」である。この言葉は滋賀県五個荘・中村治兵衛が孫にあてた遺言状「書置」文書（1754年（宝暦４年）、平成９年発見）に由来する。「三方よし」とは、「買い手よし、売り手よし、世間よし」を意味し、他国での商売を通じて生まれた概念である[7)]。

その「三方よし」の概念の生まれた理由を、たねやCEOである山本徳治は、自らの事業経験を通じて、当時の行商のありかたから生まれた思想だとしている。すなわち、江戸時代、300近くある藩から藩へ通行手形を持って行商する際に、一過性の商いでは成り立たず、その藩の人々に信頼してもらうことが何より大切であったため、三方、すなわち、売り手と買い手、そしてその地域の人々を大事にする考え方が生まれてきたとしている。さらに加えて、長期に渡り行商を続けることから望郷の思いを強くもち、それだけに近江商人は得た富を惜しげもなく故郷の村の神社仏閣に寄進したとし、故郷を大事にすることを加えて「四方よし」を提唱している[8)]。

この三方よしの概念は現代の企業の社会的貢献（CSR）に通じるものであるとされている[9)]。

7）近江商人郷土館長の末永國紀（同志社大学経済学部教授）は、「三方よし」の原点として以下の文書をあげている。
中村治兵衛宗岸「宗次郎幼主書置」「一．たとへ他国へ商内ニ参候而茂、此商内物此国之人一切之人々皆々心よく着被申候様ニと、自分之事ニ不思、皆人よく様ニとおもひ高利望ミ不申、とかく天道之めぐみ次第と、只其ゆくさきの人を大切ニおもふべく候、夫ニ而者心安堵ニ而身も息災、仏神之事常々信心ニ被致候而、其国々へ入ル時ニ、右之通ニ心さしをおこし可被申候事、第一ニ候」。末永國紀『「三方よし」の原典、近江商人中村治兵衛宗岸の「書置」と「家訓」』、財団法人滋賀県産業支援プラザ http://www.shigaplaza.or.jp/sanpou/akindo/AKINDO/frame8.htm（2009.05.20）

8）山本徳次、「たねやのあんこ、二世経営者に捧げる100の小言」、毎日新聞社、2007.2

9）前掲（６）

3-2 ヴォーリズの思想の影響

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories、1880 - 1964、日本名、一柳米来留（ひとつやなぎ めれる））はアメリカ合衆国カンザス州で生まれた。1905年、25歳のとき、キリスト教の布教と実践のために滋賀県商業学校（明治19年創立、現・滋賀県立八幡商業高等学校）の英語教師として近江八幡に来日した。1941年に日本に帰化し、近江八幡を拠点に日本で数多くの西洋建築を手懸け、またさまざまな事業を展開した。その功績がたたえられて1958年、近江八幡市名誉市民第一号に賞された[10)11)]。旧市街にはヴォーリズ自らが設計し住んでいた居宅があり、現在はヴォーリズ記念館となっている。

ヴォーリズが設立した近江兄弟社では、ヴォーリズの諸活動を以下の４つに分けて紹介している[12)]。

1）文化伝道奉仕：ヴォーリズ自身YMCA活動を通して「近江ミッション」を設立し、信徒の立場で熱心にプロテスタントの伝道に従事するとともに、讃美歌などの作詞作曲を手がけ、ハモンドオルガンを日本に紹介した。現在は財団法人近江兄弟社として、管財・伝道・出版・病院等の事業を経営し、創業者の精神を広く伝え、様々な社会奉仕活動を推進している。

2）医療保健福祉活動：1918年、結核患者のための近江療養院を開設し、発展して現在のヴォーリズ記念病院として現在も継続し、在宅看護支援センターや訪問看護ステーションなどを併設することで、地域医療、高齢社会などを対象とした地域の健康管理に寄与し、人々の健康管理に資している。財団法人近江兄弟社老人保健施設ヴォーリズ老健センターや、社会福祉法人 近江兄弟社地塩会ケアハウス信愛館などがある。

10）一柳米来留（ウイリアム・メレル・ヴォーリズ）、「失敗者の自叙伝」、近江兄弟社
11）奥村直彦、「W・メレル・ヴォーリズ」、近江兄弟社
12）財団法人近江兄弟社（ヴォーリズ記念館）「ヴォーリズ・ミュージアム」http://vories.com/ （2009.05.20）

3）教育活動：1920年に妻・一柳満喜子の協力で両親が共働きの子供たちをあずかる「プレイグラウンド」を開設し、それが現在の学校法人近江兄弟社学園のルーツとなっている。現在では、同学園は幼稚園・小学校・中学校・高等学校まで手がけ、「イエス・キリストを模範とする人間教育」のもと、社会に奉仕する自由人の育成、交換留学生などによる国際人の育成に貢献し、また、文化的活動に対して積極的な支援を行っている。

4）企業活動：ヴォーリズは、大学で学んだ建築設計技術を生かして、日本国内で、教会や学校、商業ビルや住宅など約2000件を超える建築設計にかかわり、現在も（株）一粒社ヴォーリズ建築事務所として継続している。また薬品分野で、ヴォーリズ合名会社（現・近江兄弟社）の創立者の一人としてメンソレータム（現メンターム）を広く日本に普及させ、1920年以来、近江セールズ株式会社として、皮膚関連製品専門メーカーとして活動している。

明らかにヴォーリズの思想にはプロテスタント信者として、事業を通じて得た利益は各事業を通じて社会に還元するというヴォーリズの「信仰と事業の両立」の実践、社会貢献の精神が中心にある。1920年に設立した株式会社 近江兄弟社の企業キャッチフレーズは「Operations on Mission Industry」であり、神から与えられた使命を実践に移す企業として位置づけており、また社名である近江兄弟社も、「近江」と「人類皆兄弟」の精神から命名された。学校法人近江兄弟社学園の学園訓も新約聖書マタイによる福音書５章13節～16節、主イエスの「山上の説教」からとられた「地の塩、世の光」である[13]。

プロテスタントの精神を背景に、社会に貢献してゆくありかたは、仏教を基盤とした近江商人の「三方よし」の精神と通じるところがあるといえよう。

13）近江兄弟社学園 http://www.ob-sch.ac.jp/GroundDesign/ （2009.05.20）

4 近江八幡の景観・環境保全活動

近年、近江八幡は、その歴史的に形成された都市の景観を生かし、観光に結びつける動きがめざましく、大きく注目されている[14)15)16)]。

前述のように、豊臣秀次が開削した、幅15m、全長4,750mの八幡堀は古くから物資の搬送、交易のための重要な役割を果たしてきた。しかし、時代が陸上輸送を中心とする時代に移り、舟運を支えてきた堀はむしろ無用の長物となった。琵琶湖総合開発による琵琶湖の水位低下、生活排水の質的変化が影響し、昭和30年代から40年代にかけての高度経済成長期には、堀は蚊やハエの発生源、不法投棄の場所になり、地元自治会は衛生的観点から堀埋め立てと駐車場や公園等への改修要望を市に陳情した。

しかし、1972年より近江八幡青年会議所が保全活動に乗り出し、1975年には「よみがえる近江八幡の会」が設立され、堀を生かした街づくりの動きが始まった。近江八幡の環境整備の歴史を表2にまとめる。

1973年、青年会議所の町なみ保全委員会が保存修景計画「よみがえる八幡堀」を策定し、また、自主清掃活動を行うことにより住民の信頼を得た。1975年には、行政参加の八幡堀改修促進協議会が結成されて、八幡川全川の浚渫計画を策定し、都市河川環境整備事業の認可が得られ、以後、ヘドロの浚渫、石積み護岸の整備、周辺の景観復元などが急速に取り組まれるようになった。1982年には国土庁「水緑都市モデル地区整備事業」が行われ、1988年には「八幡堀を守る会」が発足、また同年、八幡堀周辺伝統的建造物群保存地区保存条例が制定された。平成元年には風景条例に基づく市町村景観形成事業で八幡堀周辺道路の修景舗装を実施、また1992年には重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在のようなたたずまいを見せ

14) 近江八幡観光物産協会『八幡堀～八幡堀とその歴史について』 http://www.omi8.com/annai/hachimanbori_info.htm（2009.05.20）

15) 八幡堀を守る会『八幡堀受賞歴その他』http://www.biwa.ne.jp/~k-koubou/hachiman/renew4.html、（2009.05.20）

16) 八幡堀を守る会『市民活動と主な事業の略歴』 http://www.biwa.ne.jp/~k-koubou/hachiman/renew2.html（2009.05.20）

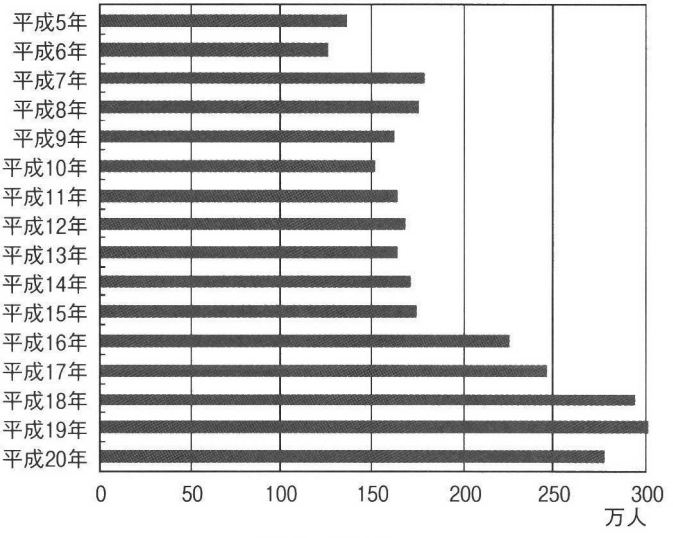
る八幡堀とその周辺地域が現れることになった。

このような取り組みに対して、国や県、経済同友会など、さまざまな組織から受賞するなど、広く認められるようになり、風土に基づく景観復元と保全の全国の先駆けとなった。

2006年には西の湖・八幡堀が全国で始めて重要文化的景観に選定（文部科学省）され、ヨシ地・公有水面等、集落等、農地・里山等、地区を総合的に景観保全する取り組みが現在行われている。このように近江八幡では、国の制度も活用しながら、景観保全が進められている。

このような努力の結果、観光人口は増加し、図１に示すように、1998年には150万人であった観光客が、2007年には300万人となった。

図１　近江八幡市への観光入込客数推移



出典：注17）

17）近江八幡観光物産協会『データでみる「近江八幡」の観光』http://www.omi8.com/gaiyo/data.htm（2009.05.20）

表2　近江八幡の環境整備の歴史

昭和30年代	生活形態の変化、生活排水汚染により八幡堀の荒廃が進み始め、交通路や生活の場から、公害源に。近江八幡市、区画整理や工場誘致等の都市基盤整備に躍起
昭和40年代	蚊やハエの発生源や市民による不法投棄の場所に。地元自治会は衛生的観点から署名を添え駐車場や公園等への改修要望を市に陳情。八幡堀に堆積したヘドロは1.8メートル、総量50,000立方メートル
昭和40年(1965)	八幡川を一級河川に指定
昭和44年(1969)	近江八幡青年会議所「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」のスローガンを掲げ、「観光目的ではなく、今現在、我々が存在するのも八幡掘があったからであり、まちの歴史が詰まった堀を守らなければならない」と八幡堀の保存修景運動を始める。
昭和45年(1970)	地元自治会は堀の改修計画を市に陳情し、堀を埋め立てて公園と駐車場にする計画が立案。近江八幡青年会議所、堀を近江八幡の誇りとして蘇らせようと改修計画の見直しを迫り、八幡堀復活を求めて署名運動・自主清掃活動を展開
昭和46年(1971)	地元（八幡学区）自治会が八幡堀浄化のための署名運動(2400名署名)、市に陳情する。県策定の八幡川改修計画が建設省の認可を受ける。
昭和47年(1972)	近江八幡青年会議所、全市民へ浚渫と復元を呼びかけ。自治会、青年会議所が八幡堀の保存と河川の浄化を目的とした署名運動（7300名署名）
昭和48年(1973)	青年会議所・町なみ保全委員会、保存修景計画「よみがえる八幡堀」を策定
昭和50年(1975)	「よみがえる近江八幡の会」が設立、まちづくりコンセプト「死に甲斐のあるまち」。堀の保存修景運動は、市民全体の運動へと展開。青年会議所メンバーによる自主清掃活動（延10数回)。八幡堀改修促進協議会を結成。八幡川全川の浚渫計画を策定し、都市河川環境整備事業の認可
昭和51年(1976)	堀の全面浚渫工事が着工、昭和54年工事完成。八幡川浚渫および護岸工事に着手
昭和54年(1979)	八幡川浚渫および護岸工事完了
昭和55年(1980)	明日の近江八幡を考える会発足
昭和57年(1982)	国土庁「水緑都市モデル地区整備事業」に指定。堀の石垣が復元、堀沿いに遊歩道・親水広場が作られた。

昭和58年(1983)	水緑モデル地区整備事業のパイロット事業（白雲橋から明治橋西側）に着手
昭和60年(1985)	水緑モデル地区整備事業のパイロット事業が完了。建設大臣より「手づくり郷土賞」（八幡堀ふれあいの水辺）受賞
昭和61年(1986)	「風景条例」に基づく市町村景観形成補助事業で八幡掘修景護岸整備を実施。手作り郷土賞（建設省）を受賞
昭和62年(1987)	「八幡堀しょうぶの会」（会員約20名）が発足
昭和63年(1988)	「八幡堀を守る会」（会長　苗村栄一郎、会員約300名）が発足。会員・除草作業。八幡堀周辺「伝統的建造物群保存地区保存条例」を制定。第３回美しい都市づくり大賞（経済同友会）。（財）日本観光協会関西支部より感謝状受賞
平成元年(1989)	風景条例に基づく市町村景観形成事業で八幡堀周辺道路の修景舗装を実施。八幡堀周辺道路の修景舗装・八幡堀河川環境整備事業。八幡堀地区近隣景観形成協定地区選定。河川環境整備事業（浄化用水導水、浚渫等）に着手。滋賀県知事より「町づくりリーダー賞」（苗村栄一郎氏）受賞
平成２年(1990)	自治大臣賞「潤いのある町づくり」受賞。近江八幡観光協会ほっとタウンクリーン作戦開始
平成３年(1991)	滋賀県知事より「町づくりリーダー賞」（西村恵美子氏）受賞。国の伝統的建造物群保存地区選定。八幡掘・新町通り・永原町通り　計13.1ha（滋賀県初の選定）
平成４年(1992)	「八幡」として重要伝統的建造物群保存地区に選定。
平成５年(1993)	浄化用水導水施設完成。「財団法人びわぎん緑と水の基金」助成金受賞
平成６年(1994)	清流ルネッサンス21の策定。淀川水系八幡川水環境改善緊急行動計画対象河川に選定
平成７年(1995)	八幡川水環境改善緊急行動計画（清流ルネッサンス21）の策定。北の庄沢の環境整備工事に着手
平成８年(1996)	国土庁選定　水の郷百選
平成12年(2000)	建設省選定　甦る水百選
平成17年(2005)	国土交通省認定　手作り郷土賞大賞部門
平成18年(2006)	文部科学省選定　重要文化的景観（西の湖・八幡堀）

表注：注14)、15)、16）の資料をもとに作成した。

5　環境保全運動の思想的な背景

近江八幡の八幡堀復元の運動主体の考え方は、言葉として明確に示されている。

前市長である川端五兵衛（1998～2006、２期在任）は、もと近江八幡青年会議所で掘の復活を目指して活動を展開した一人で、同青年会議所の理事長も勤めた。同氏は青年会議所に在籍していた当時、昭和50年から「死に甲斐のある町」を八幡堀再生のコンセプトとして提唱している[18]。それは「どんな人間でも死ぬ場所はひとつしかなく、人が死を迎えるに当たり

18）社団法人・近江八幡観光物産協会は、観光に対する取り組みの考え方として、「しかし、埋め立ての予算は既に国によって計上されており、市民も１日も早い改修を望んでいるような状況の中では、保存運動はいわば孤立状態を招きました。このような中で、青年会議所は昭和50年に「死に甲斐のあるまち」をまちづくりのコンセプトにした新たな運動を展開します。これは、働き甲斐のある場所や生き甲斐のある場所は数カ所あっても、どんな人間でも死ぬ場所はひとつしかなく、人が死を迎えるに当たりこの町で生涯を終えることに後悔しないような町と言う意味です」と述べている。社団法人・近江八幡観光物産協会 http://www.omi8.com/index1.htm（2009.05.20）

19）山本徳次は「普通、選挙の公約いうたら、「生き甲斐のある町にする」というのが多いが、それはうそや。本当に住んでみて、エエと思うのはこの町を「終の栖」としたいと思える町やとわしも思う」と述べている。山本徳次『たねやのあんこ』毎日新聞社、2007.2、144頁。

20）以下に大阪府の北摂の諸市の総合計画の将来像を列記してみる。

・吹田市第３次総合計画（平成18年度 - 平成32年度）：将来像「人が輝き、感動あふれる美しい都市（まち）すいた」http://www.city.suita.osaka.jp/kakuka/seisaku/soukei/index.htm（2009.05.20）

・第３次豊中市総合計画（平成13年度－平成32年度）：まちづくりの基本理念「人と地域を世界と未来につなぐまちづくり」（まちの主役としての「人」、生活の舞台としての「まち」、人と人、人とまちをつなぐ「しくみ」）http://www.city.toyonaka.osaka.jp/top/shisei_joho/keikaku/soukei３/kihon_kousou/index.html（2009.05.20）

・高槻市総合計画（基本構想）（平成13年度－平成33年度）：将来の都市像「心ふれあう　水とみどりの生活・文化都市」「さわやか未来　ふるさと高槻」http://www.city.takatsuki.osaka.jp/db/seisui/sogo/db３-sogo.html#kettei（2009.05.20）

・茨木市第４次総合計画（平成17年度－平成27年度）：構想の基調「希望と活力に満ちた文化のまち　いばらき」http://www.city.ibaraki.osaka.jp/office/kikaku/soukei４th/schedule/index.html（2009.05.20）

この町で生涯を終えることに後悔しないような町」という意味である。また同氏は市長選挙の公約として、この言葉を挙げている[19]。

通常、街づくりの目標や標語などでは、「希望」「活力」「感動あふれる」「心ふれあう」「さわやか」「未来につなぐ」といった、肯定的なイメージの用語が多用される[20]。また、現在の都市の理想を明るく表現し、現在を中心に未来を形成する内容となっている。街づくりの標語に「死」という語を使うことは全国的にも異例であろう。この言葉の中に、未来像から逆算して現在を形作る、また人の全生涯を積分してその充実度を満たす街づくりをするといった考え方が含まれているといえよう[21]。それはまた、仏教の死生観を基にするものと言えよう。

高度経済成長期には「箱物行政」といわれるように、補助金を使ってさまざまな公共施設が建設され、それによって建設土木業による一時的とも言える経済振興が行われた。それに比べて早い段階から上述のような考え方をもとに街づくりを行ってきたことは注目に値する。

山本徳次は著書の中で、幼いころの遊びの空間に、寺社やヴォーリズの建築物、堀など、歴史的な建造物が当たり前のように存在し、その中で遊んだことの経験を述べている。後に長じて自らが大人になると、幼いころに知らずに遊んでいた空間は、実はヴォーリズや近江商人の利他的な考え方が埋め込まれていることを知ることになり、それらの思想を自らの基盤として学び返し、経営者としての素地を形成してゆく[22]。

21）近江八幡観光物産協会は、「近江八幡市における観光は、観光客のための観光ではなく、市民を中心としたまちづくりの結果として生まれるものであり、まちの重要な資源である歴史や文化・自然・景観等に市民が愛着を持って守り育てながら、その資源としての価値を活用し、未来へとつないでいく営みです。“いいまち”の基準とは単に『都市のインフラや住み心地の良さによるものではなく、自らのまちを愛し、その発展のためには、我が身を省みることなく尽くそうとする人達がどのくらい住んでいるのか、その割合による』と位置づけ、その上で、このまちで住みたい、このまちで生涯を終えたいと思えるまちづくりを進めることが最善の策と考えています。」としている。前掲（18）

22）山本徳次は子供のころ、大勢の子供たちと、ヴォーリズの建造物のレンガ積みの塀の上で走り回り、寺の大屋根の棟瓦の上を歩くなど、そのころの体験が経営者として必要とされる経験の素地になっているとしている。前掲（19）、17頁～19頁

若干の考察を加えたい。図2に見るように近江八幡に入ってきた思想と、それにもとづく建造物などの歴史を見ると、1900年近い歴史を持つ神道、1400年の歴史をもつ仏教、商人や技術者を集住させた豊臣秀次の都市基盤整備の400年、その基盤の上に琵琶湖畔の資源と流通の要の地理的位置を利用して発展した近江商人の「三方よし」の350年、80年ほどの歴史をもつ近代市場経済、とりわけ戦後の公共投資と開発思想、以上の集積の上にたってのこの30年の環境保全の思想、それらが別々のものではなく、折り重なるように、積み上げられて今の近江八幡があるといえよう。

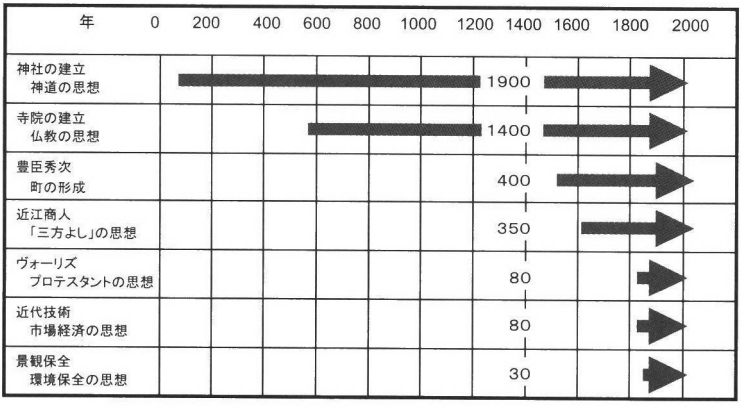
歴史的建造物、歴史的空間は、それらを形成した当時の人々の思想の顕れであり、形として代々受け継がれるものの中に、深くその思想が受け継がれてきている。それが現代、そのまちに住む人々に意味や思想を語りかけ、また人々は再度その豊かな基盤を基にして自らの思想を形成し、空間として表し、次代につなぐ。まちという空間は思想の継承の場とも言えるだろう。そのような継続性、蓄積性を理解せずして表層的な理解で地域に皮相的な人工物や思想もちこむものは、地域に根付いていないがゆえに、時間を経ずして風化し消え去ることとなるだろう。みかたをかえれば近江八幡が特殊なのではなく、むしろ戦後の都市形成は歴史的な集積を無視して塗り替えられてきたと言えるだろう[23)]。

23) 都市は産業、経済のみの空間ではない。そこでは子供たちが育ち、学習する場でもある。都市の機能が経済的な合理性をのみ追求して構成されるとしたならば、子供たちが、さまざまな思想を都市から学ぶことはない。学校では教科の教育は受けても、道徳や理念、思想といったものは、個人の努力や家庭のもつ役割とみなされていて、これまでに都市空間が審美的には洗練の途をたどったとしても、育ち、学ぶ子供たちに、はたして人生観を養うような空間や社会が意図的に用意され、埋め込まれてきただろうか。

24) 重要文化的景観としてヨシ地・公有水面等（西の湖、長命寺川、八幡堀、約174.6ヘクタール）と集落等（白王町、円山町、約13.7ヘクタール）が対象地域である。選定理由として、「内湖とヨシ原などの自然環境がヨシ産業などの生業や地域住民の生活と結びついている」、「干拓や圃場整備によって湿地生態系の衰退や景観の改変が引き起こされており保護が必要」に加え「近江八幡市が景観計画の策定や地域住民の参画など文化的景観の保護に向けて取り組んでいる」ことがあげられている。近江八幡市「重要文化的景観」http://www.city.omihachiman.shiga.jp/contents_detail.php?frmId=503（2009.05.20）

「近江八幡の水郷」が、重要文化的景観として国へ申請し、2006年にこの制度の全国第１号として選定を受けたことも、以上の文脈の中で受け継がれてゆくものであろう[24]。

図２　近江八幡に入ってきた思想の影響の歴史



６　環境に配慮した都市形成と利他主義

近江商人に由来する「三方よし」の思想は、自らの利益だけでなく、商売相手の利をはかり、かつ自らの郷土の発展をはかる、そのような思想を含んでいた。また、近江八幡を拠点として展開したヴォーリズの、キリスト教に基づく企業活動と福祉活動を一体とした考え方があった。これらを含む、多くの人々によって蓄積され、形成されてきたのが近江八幡の都市空間である。一時は埋め立ての危機に瀕した掘割を、水と歴史を中心とした空間として回復・保全することで、住民にとって快適な空間を生み出し、それがまた多くの観光客をひきつける。これらの個人の思想や集団の思想がいずれも私利だけではない、他に作用していこうという思想が含まれていて、現在の近江八幡の都市形成の基層となっていると見るとことができる。ここに、近年、多方面で取り上げられるようになってきた「利他主義」の議論に関連づけて考察を加えたい。

市場経済では、生産活動、消費活動が行われるとき、消費者は価格を指

標として、財やサービスから受ける効用が同一ならばより安価な財やサービスを求める。そして、財やサービスを提供する側には同業間で熾烈な価格競争が生じる。その際に、生産者は財やサービスを生産する際に、投入にかかる費用を最小化し、得られる産出を最大化することが競争の際に求められる[25]。

環境経済学の中では、産業による環境汚染の歴史を検討する中から、「外部不経済」の概念が早くから確立してきた。企業公害がそうであったように、企業は公害防止費用を負担せず（支払わず）、環境への影響、被害を拡大させた[26]。

外部不経済を無視して効率を高めてきた産業の在り方の反省から、「外部不経済を内部化する」考え方は、社会の共通の認識として高められ、法令化されることで、かつての先進国の劣悪な都市環境とは比較にならない良好な環境を生み出すことに寄与してきた。

そこには、企業や個人が人や自然を含む他者に対して、それも空間的、時間的に遠いところに存する他者に対して、思いを運び、それへの影響を自覚する、ひとつの倫理観が生まれてきたといえよう[27]。すなわち、「遠いところ」「遠い時間」と主体である自身が関係している、影響している

25) アーヴィン・ラズロは、近代の市場経済中心の世界観が時代遅れになりつつあると指摘し、その価値・信念体系の特徴として、①物事を進めるにあたり効率性がもっとも重要、②すべてはお金に換算可能、③個々の人間は個別の存在、④市場にゆだねれば社会はうまく機能、⑤生き残るためには競争が不可欠、とする考え方を指摘している。日本ホリスティック教育協会、吉田敦彦・永田佳之・菊地栄治編、「持続可能な教育社会をつくる－環境・開発・スピリチュアリティ－」、2006、せせらぎ出版

26)「外部不経済」は企業活動に関わることだけではなく、個人の生活行動についても同様で、個人が活動を行う場合に負の環境影響に対して「支払う」ことなく行動を行っている場合もある。一例として、家庭で自家用車を所持し「車に乗る」という行動ひとつとってみても、所有者は車を乗る際に、「支払われているもの」として、車両購入代、車検代、保険代、ガソリン代、リサイクル代等を認識し、複数の車を選択する際の指標をしている。他方「支払われていないもの」には、二酸化炭素、タイヤ磨耗による汚濁負荷、NOx・SOx、騒音、振動などには支払ってこなかった。すでに、30年前に、宇沢はこのことを計量し、示してみせた。宇沢弘文、『自動車の社会的費用』、岩波新書、1974.

ことの認識を持つことが当然とみなされる時代にと至っているといえる[28]。

1984年に国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会」が提示し、1992年の国連環境開発会議で中心的な考え方となった「持続可能な開発」すなわち「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」の考え方に要約されるだろう[29]。

このような環境分野での「持続可能な開発」の概念はまた、近年、学問の対象として取り上げられつつある「利他主義」あるいは「思いやり」と関連付けて検討することができる[30]。

「利他」の意味合いは、利己—利他の関係を、時間軸、空間軸、対象、

27）これは資源問題、廃棄物問題、化学物質問題や地球環境問題と、いずれをとってみても生態系の原理、すなわち物質循環を介して、生物と無生物、個体と個体が関係しているという原理が根底にある。企業や個人もその一部であり、決してそれ自身では存在しえず、かならず時空間を介して、別の他者からの影響、他者への影響を有していることからくる当然の帰結でもある。また、生物や社会的弱者の痛みの共感を、全主体が有することが展開しつつあり、それは時空を隔てた他者にたいして、自らが与える影響に思いをはせ、それが負の影響ならば影響を減じ、正の影響ならばそれを増大することを目ざすといった、一つの価値観がたちあらわれつつあるとも言えよう。これらは貨幣価値だけでは評価できない、また、経済活動だけではおさまらない、意識や行動、活動を生み出してゆく。

28）負の影響は想像しやすい。未処理の廃液を水域に放流することで、水域が汚染され、生物が死滅し、場合によってはそれに依拠して生活する人々の生存が脅かされる。また大量の廃棄物を生み出すことにより、自然の空間を処分場として消費してゆく。大量のエネルギーを使うことで数千年にもおよぶ管理を要する放射性廃棄物を生み出す、などである。これに対して正の影響は想像しにくいかもしれない。負の影響が与えていた環境破壊を復元すること、生態系の復元、回復など、また子孫に対して、良好な景観環境を残すことなどがそれに当たるだろう。

29）WCED（World Commission on Environment and Development、ブルントラント委員会）"Our Common Future"、環境と開発に関する世界委員会、『地球の未来を守るために』、福武書店、1987.7

30）宗教学の中で、稲葉は、「利他主義」とは、もともとフランスの社会学者コントによる造語で、利己主義（egoisum）に対して、利他主義（altruism）が位置づけられ、その意味に一番近いのは「おもいやり」ではないかとしている。すなわち、「根底に他者に対する気づかいがある」「遠くのものをはるかに思う、人の身の上、心情などについて思いをめぐらす」という意味であり、「古今和歌集」「伊勢物語」に「おもひやり」との言葉が示されているとしている。稲葉圭信、『思いやり格差が日本をダメにする』、NHK 出版、2008.10

関係の媒体（こころ、もの、物質など）などの観点から整理ができるだろう。

「自と他の間の物的、非物的関係を理解」し、「物的、あるいは非物的」な他への「負の影響を少なくする」ことであり、また「正の影響を大きくすること」と言えよう。また正の影響として、他を尊重し、育み、育てる、といった意味合いも含まれているだろう。

「自」と「他」の関係において、「過去世代―現代世代－未来世代」の時間軸でみた関係、「ここ―近在―彼方」の空間軸でみた関係、また「思いやる」作用の対象として「生物（人、人以外のいきもの）－無生物」の関係を問うことであり、そのつながりは原因と結果の連鎖の理解としてあらわれる。

そこには、自らを大事にすると同時に他を大事にする、自らと他とが同一であるという認識が根底にある。さらに敷衍すれば、近代化以前の日本人が理解していた「人間」と目に見えない「魂」との間の関係にまでおよぶだろう。

近年、市場経済とは異なる分野として、利他的な社会組織や活動が生まれ、福祉や教育、環境、芸術など、さまざまな領域に対して活発に活動を拡げている。いまや社会組織のひとつとて、ＮＧＯ／ＮＰＯの存在は当然のように語られる。「グラミン銀行」[31]や「隣人祭り」[32]など、これまでの市場経済だけの関係性を変えるため、あるいは市場経済から漏れ落ちたり、排他するような関係性、すなわち支配―被支配の関係性や貧富の関係性を打ち破るための新たな社会の仕組みが、多様な分野、多様な形態で生まれ始めている。利己主義を超える関係性の回復が問われている。

今後の環境に配慮した都市を形成していくにあたり、近江八幡にみるような利他主義的な活動や都市づくりが歴史の蓄積をへて後世に伝えられていることをみるとき、絶えず利他的な意識をもちつつ都市のありかたが計画され、具現化されてゆくことが大事だろう。

31）ムハマド・ユヌス、『貧困のない世界を創る』、早川書房、2008.10
32）アタナーズ・ペリファン，南谷桂子、「隣人祭り」（ソトコト新書）、木楽舎、2008.6

7　まとめ

本稿では、滋賀県近江八幡市の都市環境形成を歴史を事例として、その背景にある思想がどのように都形形成に関係してきたかを検討し、利他主義との関係を述べた。以下にまとめることができる。

1）近江八幡市では、仏教や神道の寺社仏閣に加え、秀次による商業都市の骨格、近江商人による「三方よし」の思想による掘割など公共空間、ヴォーリズによる「キリスト教の精神にもとづく企業の社会貢献」の考え方による建築群が旧市街地の中に埋め込まれている。
2）都市空間の中の建造物や公共空間はそれら近江商人やヴォーリズの思想を伝達する役割を果たしていて、近年の環境整備、都市整備の根底にある思想の先進性に反映しているといえる。すなわち建築群や都市空間そのものが、思想を伝える媒体として機能していると言える。また、数百年の時間を越えて、現在、その都市にすむものに精神的な影響を与え続ける。
3）経済的な効率を求めることから生じてきた環境への負の効果の集積に対する反省から、近年の環境思想である「持続可能性」の概念が生まれてきた。これは未来の、遠い他者に対する配慮を促すものであり利他主義として呼ばれる考え方と共通している。

近年、「地球規模で考え地域規模で行動すること」が、環境保全の分野では一般的な考え方となり、循環型社会や低炭素社会の形成、住みよい都市空間の形成にむけての取り組みが市町村で一般化しつつある。数十年先の環境像を達成するため、現在の都市の諸活動の環境への影響の見直しが行われているが、都市の歴史性や文化性を考慮することなく計画が行われている。都市の中に歴史的に埋め込まれてきた利他主義の思想が現在に影響を及ぼしている近江八幡のありかたを見るとき、ひとびとの思想が物的な都市空間を通じても継承されてゆくことの大事を知るとともに、将来の環境像を考え計画を策定するにあたっても、このような点を配慮すること

が大事だろう。